

Charles Eby『眞の生命』と柴田鳩翁『鳩翁道話』 —キリスト教と心学の説教における喩えの比較—

松 本 隆

The similarities and differences among figurative
expressions in C.S.Eby's *Makoto no Inochi* and K.Shibata's
Kyūō Dōwa

Takashi MATSUMOTO

Christian missionary Charles Samuel Eby's sermon books on the Ten Commandments *Makoto no Inochi* (*True Life*) were published from 1879 to 1882. This paper examines how Eby used figurative expressions in his books, in comparison to that of Kyūō Shibata's "Shingaku" (heart learning) sermon books called *Kyūō Dōwa*, published from 1835 to 1836. Shibata's *Kyūō Dōwa* were widely used as learning material by western people who were interested in Japan and wanted to learn colloquial Japanese expressions. Eby published his Japanese textbooks in 1881 and 1892, namely *Kyūō Dōwa*, transliterated and annotated with vocabulary to the original texts. There is a fair possibility that Eby's sermons were influenced by Shibata's style of preaching. Comparison between texts showed that Eby and Shibata's sermons shared similar expressions at the micro level but each one had its own characteristics at the macro level. Both Eby and Shibata preached plainly to the ordinary people, making use of various similes and metaphors, in polite and easy to understand "gozarimasu" style Japanese. While their books share common expressions, allegories in their sermons play different roles. Eby utilised allegories as evidence to explain doctrines logically, in other words, "logos" took priority over "pathos" in his sermons. Contrary to Eby, Shibata attached greater importance to "pathos" than to "logos"

and he pressed listeners for reflection and soul-searching. Shibata was good at telling long allegorical stories in an amusing fashion, and extracting essential lessons from the stories.

要 旨

宣教師 Charles Eby による説教（十戒の講解）を聞き書きした『眞の生命』が明治初期に出版された。本書と、Eby が日本語の習得ならびに説教の準備に参照したと思われる江戸後期の心学本『鳩翁道話』を比較した。両書には、一般の人々に向けて平易に語った説教が集録されている。どちらも理解を促す喩えを交えながら、丁寧な日常口語の「ござります」体を用いており、類似する点が多く見いだせる。しかし同時に差異も目立つ。本稿ではそのうち、説教のなかで喩えが果たす役割の違いに注目した。娯楽性ゆたかな『鳩翁道話』はパトス（感情）を優先した説教であり、説教全体に占める譬えの割合が大きく、譬え話の中に教義が織り込まれている。これに対し、『眞の生命』はロゴス（論理）を優先した説教であり、譬えの占める割合が小さく、教義の正当性を立証するために喩えが援用されている。

1. はじめに

小稿は、キリスト教の伝道書『眞の生命』^{まこといのち}と心学本『鳩翁道話』^{きゅうおうどうわ}を読み比べ、その類似点と相違点を検討するものである。両書は、それぞれの教義を、一般の人々に向けて、日常的な口語体で平易に説き明かしている。喩えを多用する点も共通するが、その働きには違いが見られる。

小稿の前半は両書の類似点、後半は相違点に注目する。具体的にいうと前半は、書物としての構成と成り立ち（第2節）、教義上たいせつな「心」の捉え方（第3節）、両書の関連性（第4節）、文体（第5節）、説教の流れを司る諸表現（第6節）、という構成に沿って類似する諸点を考察する。

後半は『眞の生命』を中心に据え、『鳩翁道話』を念頭に置きながら、譬えの働き（の違い）を浮かび上がらせる。『眞の生命』に盛り込まれた譬えは、当時の日本の庶民感覚に合致したもので（第7節）、イビーはそれらの譬えを利用して自説の正当性を主張するとともに（第8節）、他者の説を批判する（第9節）。さらに実際の出来事（例話）も自説の論証に

用いている（第10節）。論理を積み重ねていくイビーの説教には物語形式の長い喩え話が少なく（第11節）、逆に、鳩翁の説教は娯楽性ゆたかな長い喩え話が長く聞く人の感情に訴えかける（第12節）。

以上が各節の概略である。次節からの両書比較にあたり、基本的な書誌情報を下にまとめた。適宜、参照されたい。

両書の基本情報

①書名	②口述者	③筆録者	④刊年	⑤主題	⑥副書名
眞の生命	C.S.Eby	坂本安吉	1879-82	十戒	一名聖教講義記聞
鳩翁道話	柴田鳩翁	嗣子武修	1835-36	経書	（正・続・続々篇）

2. 類似点その一：喩えが豊富な説教の聞き書き

この節では上の表に従って『眞の生命』と『鳩翁道話』の書物としての成り立ちや性格が似通っていることを確認する。

前者は正式名を『眞の生命：一名聖教講義記聞』^{まこと いのち}といい、副題が示すように「聖教」すなわちキリスト教に関する「講義」を「記聞」^{きぶん}つまり聞き書きした記録である。本文中では「講義」の代わりに「講釋」の語を用いているが、要するに今日でいう講解説教録である。カナダ・メソジスト教会の宣教師 Charles Samuel Eby（1845-1925、以下「イビー」）が十戒について講解した説教の書籍化で、キリスト教週刊新聞『七一雑報』^{しちいち}は1879（明治12）年1月10日付3面「教會新報」欄で「語も文章も極解りよく坂本安吉氏の輯録されし本でござり升」と発刊を報じている。1879年から分冊版が順次刊行され、全7巻をまとめた合本が1882年に出版された。

小稿での引用は1884年刊の合本（イビー1884）^{（ママ）}、横浜市立図書館デジタルアーカイブ蔵本に拠った。この合本の表紙書名は『眞之生命』^{まことのいのち}であるが、各頁の版面余白には「眞之生命」と「眞の生命」が混在し後者が多くを占める。小稿では、分冊版の『眞の生命』^{まこと いのち}の表記に合わせて仮名「…の…」に統一した。なおこのデジタルアーカイブでは上掲書のほか、分冊版の第2～7巻（第1巻を欠く）と、1883年刊の合本も全頁の画像が公開されている。

引用に際し、合本における所在を5桁の数字で示し、照合の便とした。

例えば「^神かみは愛である e11902」の「^{あい}e11902」は第1巻19頁2行目から引用したことを意味する。ちなみに合本は原則1頁12行詰め、頁は各巻ごとに1頁から始まり、通巻頁は振られていない。「e」はEbyの頭文字で、後述する柴田の「s」と区別するための記号である。引用は、縦書きを横書きに改めた以外、なるべく元の形を保存するよう努めたが、表記上2つの点で手を加えた。1つは分かち書きを廃して振り漢字を施したこと、もう1つはごく一部の再現できない字体や記号を別のもので代用したことである。漢字の使用を控えて仮名を多用する本書は、分かち書きを採用して、仮名が連続して読みにくくなるのを防いでいる。小稿の引用では、原則として分かち書きを廃し、その代わり必要に応じて振り漢字を施した。仮名の上部、ルビの位置に小書きした漢字は、稿者が振ったものである。当該語が本書の別の箇所漢字表記されている場合はそれに従い、本書中に漢字が見あたらない場合は稿者の判断で当てる漢字を選んだ。例えば「^神かみは愛である e11902」の「^{あい}神」は、別の箇所の漢字表記に倣って稿者が施したものである。

さて、もう一方の『鳩翁道話』は、柴田鳩翁が諸方で巡講した内容を、養嗣子の武修（遊翁）が側に侍して、口演の語調もそのままに筆記したものがある。正篇（1835・天保6年刊）、続篇（1836）、続々篇（1836）とも3巻6冊（壺之上～三之下）からなり、後世になって拾遺（1929・昭和4年刊）が編集された（柴田1970:315-316, 1971:492）。主題として正篇は『孟子』、続篇は『大学伝』、続々篇は『中庸』といった経書から一節を選んで講釈がなされる。

小稿で引用する本文は、岩波書店の日本思想大系42『石門心学』（柴田1971）233～292頁に所載の「鳩翁道話」に拠った。引用文の末尾に、例えば「心を正直に御持なされ s25808」のように上掲書における所在を示した。「s」は柴田の頭文字で、先のEbyの「e」と区別するための記号である。続く数字3桁「258」が頁数、下2桁「08」がその頁における行数を示す。ちなみに上掲書は原則1頁18行詰めである。

『眞の生命』も『鳩翁道話』も講解説教の一般的な流れに沿っている。すなわち両書とも各回の説教は、おおむね次のように展開していく。(1)これから講釈する主題、『眞の生命』であれば十戒のひとつの条文、『鳩翁道話』であれば経書の一節を引く。(2)引用した一節に含まれる難解な語

句や字義の説明,あるいは文字通りの解説をして表面上の理解を促す。(3) 長短さまざまな比喩や譬え話, 実例などを交えながら, 主題の真意をより深く理解できるように導く。(4) 要点を再確認し, 主題の教えるところに従って励むよう勧奨して, 話を締めくくる。

このうち説教の中心となる(3)に, イビーと鳩翁それぞれの個性を反映した様々な喩えが盛り込まれている。

『眞の生命』全7巻の構成を下表にまとめた。各巻が取り上げる十戒の条文と, 特徴的な喩えなど2～3例を示した。

『眞の生命』全7巻の構成と喩え

巻 十戒 おもな喩え, 挿話, 実例など

- 1 第一条 とけい師の作った自鳴鐘, 政府や國に対する人民の忠義
- 2 第二条 錦絵の役者を父とよぶ子, 政府や天皇の権利, 墓参法事
- 3 第三条 親不孝な子, 使にきた者への扱い, 獵人に追われた駝鳥
- 4 第四条 自然薯が鰻になる論, 基督教國で日曜に休業する商人舗
- 5 四条つづき 米と酒, 日曜に商賣を休んで余計働きができた事例
- 6 第五条 畑に刺棘を蒔く, 親の抱く布包みから早瀬に落ちた赤子
- 7 第六～十条 金の時計を眞鍮の代價で買取る, 人の難義を見込む

3. 類似点その二: 鏡像関係にある「心」の捉え方

幕末維新期に日本研究の先駆をなした英国の外交官アストンは心学本を高く評価し(楠家 2005:27), とりわけ『鳩翁道話』について「… the Kiuō Dōwa is undoubtedly the most amusing. Indeed, it may safely be said that few more entertaining sermons are to be found anywhere.」と述べ(Aston 1899:343), これ以上おもしろい説教はほかにない絶賛した。また本書の, 非の打ちどころのない道徳性 (unexceptionable morality, 同頁) にも言及している。

日本語を学ぶ外国人にとって『鳩翁道話』は話し言葉のよき素材となり(金沢 2013), 本篇の式之上を加工した教科書『A First Japanese Book for English Students』が1874年にロンドンで出版された(O'Neill 1874)。イビーも, 1881年に本篇の壺之上だけを, 1892年には壺之下も加え, 本文をローマ字化し対訳語彙と注釈を付けて教科書として出版した(Eby

1881,1892).

『鳩翁道話』 壺之上・下は『孟子』の「ジンハヒトノコハロナリ仁人心也、ギハヒトノミチナリ義人路也…s23503」を主題に取り上げ、式之上は同書のつづき「ガクモンノミチナシ學問之道無_レ他、タ求_二其放_一心_二而已_一矣 s25506-07」を扱う。式之上を教材化した先のオニールは「放心」を「diverged heart」, 「本心」を「original heart」と訳し (O'Neill 1874:1,11), さらに「放心」について「This expression indicates a theory the very reverse of that of Original Sin. In the philosophy of Mencius man is born with an originally pure nature (*hon-shin*) to revert to which is the object of all virtuous aspirations.」と注釈する (同 p.2). 儒教の性善説に基づく心学の「心」の捉え方が、キリスト教の「原罪」いわば性悪説の考え方と正反対であることに着目している。

心学によれば、人は持って生まれた望ましい「本心」から離れて、「放心」した状態に陥りがちだという。この見失われた「本心」に立ち返るよう諭すのが道話の趣旨である。これはキリスト教における「回心」を連想させる。

イビーは自らが教材化した『鳩翁道話 (壺之上)』の中で、心学の教えに触れ「…, it approaches wonderfully near the Christian “golden rule,” mixed of course with much that is crude and erroneous.」(Eby 1881:15, 1892:47-48) と注釈し、キリスト教と心学の類似性を指摘している。原罪についてイビーは『眞の生命』の中で「ひととはもときよ聖くありましたが罪あるものとなり e11603」それ以来「人のうまれつきの心ひとは始祖こゝろの罪が段々せんでんせんぞ傳染して居ります e71609-10」と説明する。そこで我々は、もとの聖くあつた本来の「心こゝろにたちかへり神かみにたちかへり e40811」そして「眞の道を學まなぶ e51001」必要があることを説く。

以上のように、生まれつき我々がもつ心の状態について、キリスト教と心学とでは、左右真逆の鏡映しのような捉え方をする。イビーの説く「もときよ聖く」あつた無原罪の「心こゝろにたちかへ」れという教えと、心学における「放心」から「本心」への立ち返りは、イビーの「wonderfully near」という言葉どおりよく似ている。イビーはまた「本心に教ほんしん込おしえこむには眞の理まことでなければ益えきもない e60807-08」とか「心こゝろを道みちによせて e41009-10」など、心学道話を思い起こさせる表現も用いている。

このように心学における「本心」への回帰は、キリスト教における「回

心」と鏡像関係にあるため、両者は親和性があったようである。そうしたことからイビーらキリスト教国の人々にも心学本は好意的に受け取られた。少なくとも『鳩翁道話』は日本語学習素材として歓迎された。

1883（明治16）年4月に、日本各地からプロテスタント諸派の外国人宣教師が集い、大阪で宣教師会議が開催された（Publishing Committee 1883, 竹本 2004, 松本 2016）。その議題の1つに、新たに来日する宣教師のための日本語学習課程モデル案の検討も含まれていた。これを立案したのは、イビーを含む10名からなる日本語教育課程委員会で（Publishing Committee 1883:xii, 竹本 2004:370）、仮名の読み書きから始め、3年のうちに説教ができるレベルまで達することを目指す案である。その間に用いるテキスト11種のうち2種を、心学本の『鳩翁道話』と『心学道の話』が占めている（Publishing Committee 1883:279-280, 竹本 2004:372, 松本 2016:95）。

外国人宣教師の日本語学習に『鳩翁道話』や『心学道の話』が推奨されたのは、言文一致が確立する以前の近代文体模索期にあって、口語体で書かれたこれらの心学本が話し言葉のテキストとして貴重であったという理由ばかりではない。アストンがいう「unexceptionable morality」（非の打ちどころのない道德性, Aston 1899:343）はキリスト教との親和性もよく、日本の大衆をキリスト教に導く語りかけ方の示唆を心学の説教から得られた意義も大きい。この点については第5～6節で後述する。

ところで、西欧諸国の近代化にキリスト教が貢献したように、心学が日本の近代化に寄与したという説がある。ベラー（Bellah 1957, 1985, ベラー 1966, 1996）は、非西欧圏で日本だけが急速な近代化に成功した理由について「日本には、西欧の経済、政治、科学、家族その他の近代的発展に際だって貢献したプロテスタントのキリスト教の倫理的普遍主義と適合する『機能的等価物』が存在する」（ベラー 1996:17-18）と考え、心学がその「機能的等価物」の一翼を担ったと主張する。この見方には反論もあるが（丸山 1958/1996, 津田 1976:147, ベラー 1996:18）、海外からそのような共通性が指摘されている点が興味深い。

4. イビーと『鳩翁道話』の関わり

『眞の生命』を『鳩翁道話』と読み比べていると、よく似た日本語の表

現にしばしば出会う。類似点のすべてが鳩翁の影響によるものではなからうが、鳩翁の説教からイビーが多くを学んだことは、イビーと『鳩翁道話』との関わりをたどることで類推が可能である。

前述したようにイビーは、1881年に『鳩翁道話（壺之上）』を日本語教材に加工して出版し、1883年の大阪宣教師会議ではイビーも委員を務める日本語教育課程委員会が『鳩翁道話』を学習素材として推奨している。1881年の『鳩翁道話（壺之上）』は好評を博して発売後まもなく品切れとなり続編の発行が待望されていたと、1892年の『鳩翁道話（壺之上・下）』の序文に記されている。イビーが後進を育成する語学教材として『鳩翁道話』に信頼を寄せていたことがわかる。

イビー自身が鳩翁の道話を日本語の学習素材に利用したかは未詳だが、来日から『鳩翁道話（壺之上）』を出版するまでの足取りを追うと、自身の学習に鳩翁の道話を利用した可能性の高いことがわかる。

イビーは1876（明治9）年9月8日横浜に上陸後、静岡を拠点に伝道していたが、招かれて山梨県南巨摩郡南部に赴き1877年7月24日から8月20日までの約1か月間、私塾・蒙軒学舎もうけんがくしやで教鞭をとった（沢田1976:71）。のちに「英語同様の流暢さで説教することができた」（保坂1980:11）ほどに語学の才能を花開かせたイビーも、来日1年未満で日本語の学習歴も浅く（沢田1984:375）、甲州の人々に対する十戒の説教は通訳を介して行われた（平岩1942:189）。この時点ではまだ日本語の読み書きにも不自由したと思われる。そのような段階で、日本人むけの出版物を読解の生教材に用いるのは難しい。イビーも日本語の表記（漢字や変体仮名）が学習上の障壁になることを自著の序文冒頭で「The great difficulty in the way of satisfactorily learning the Japanese language is that its literature is entombed in a mass of Chinese hieroglyphics and never ending variety of Japanese *kana*, …」と述べている（Eby 1881:I）。そのため日本語に不慣れなうちは、ローマ字転写した本文に、英訳や注釈が添えてある教材があれば望ましい。先に紹介したオニール（O'Neill 1874）の『*A First Japanese Book...*』はその要求を完全に満たしている。この本は『鳩翁道話』本篇の式之上に、懇切丁寧なまでに手を加えた教材である。これより先にミットフォード（Mitford 1871）は日本の物語の英訳集『*Tales of Old Japan*』を出版しており、この中に『鳩翁道話』本篇の壺之上から式之上

までの3席が収められている。まだ日本語に不自由していたイビーは、『*A First Japanese Book...*』などを用いて鳩翁の説教に倣い、日本語に熟達する道をたどることができたのである。

5. 類似点その三：言文一致の「ござります」体

この節では『眞の生命』と『鳩翁道話』の言語形式上の類似点のうち、文章全体に関わる文体的な特徴について検討する。

両書は「(…で) ござります」基調の丁寧な口語体で綴られている。『眞の生命』は、イビーが「彼自身の丁重な日本語の話しことばで〔中略〕親しい調子で大衆に話しかける」(保坂 1980:27) ように「当時の話し言葉そのままで記されている」(宮田 2003:24) という文体的な特徴をもつ。口述筆記本であるから「話し言葉そのままで記されている」のが当然かという点、言文二途(言文不一致)が当然の時代にあつて、イビー「自身の丁重な日本語の話しことば」が文面に写されているのは、むしろ珍しいことである。先の日本語教育課程委員会が推奨する教材11種に心学本が2種も含まれているのは、道徳的な内容の適切さもさることながら、自然な話し言葉で綴られた素材を他には求めにくい事情にもよる。聞き書き形式で口述のまま板行された心学道話は、委員会の推奨する教材2種以外にも、いくつかが今日まで伝えられている(柴田 1970:320)。

森岡(1980:33)は「話し言葉を下敷きにした文章表現、あえて言えば、当時における共通語に基づいた言文一致体」を「道話体」と呼んだ。『鳩翁道話』を代表とする心学本にちなんだ命名である。方言的な特徴や位相性のないこうした「言文一致体」は、江戸から明治の講義物に引き継がれ、標準的な口語文体に発展したと森岡(1980:33)は言う。

『眞の生命』も「道話体」の流れをくむ書物といえよう。イビーが「ござります」調で説教したことよりも、「話し言葉そのままで記されている」点が重要である。この「言文一致体」は、イビーが忽然と独自開発した文体でなく、心学本の「道話体」に倣ったとみて然るべきである。

なお「当時における共通語」の標準的な「ござります」体を両書とも採っているが、19世紀前半の『鳩翁道話』は上方の話し言葉、19世紀後半の『眞の生命』は東京の話し言葉を反映している。横浜・静岡・甲府・東京で活躍したイビーが、1783(天明3)年に京都で生まれ育った柴田鳩翁の上方

弁まで真似ることはなかった。

6. 類似点その四：説教の流れを司る表現

先の第2節「類似点その一」で『眞の生命』と『鳩翁道話』が講解説教の一般的な流れに沿っていることを述べた。両書は説教の節々で、話の流れを司るために、類似の表現を用いたり、同じ趣旨の発言をしったりしている。

下に両書から対で引いた用例は、本題に入る前置きとして、説教の趣旨を事前に了解するよう、聴衆に求めている場面である。

『眞の生命』第三巻 (e30104-07)

どうか語^{ことば}の未熟^{みじく}と比喻^{ひきべつ}のつたないの^{おほめ}を恕^{いつさい}にみてさやうな^{かみ}ことには一切お
かまいなくたゞまことの道理^{だうり}だけを人間の詞^{にんげん}とおもはづ神^{ことば}の詔^{みこと}とこゝろえ
ておきゝなさつてくださりませ

『鳩翁道話』巻之上 (s23515-23601)

随分詞^{ずいぶんことば}をひらたうして、譬^{たとへ}をとり、あるひはおとし話^{ばなし}をいたして、理^りに近^{ちか}
い事^{こと}は、神道^{しんたう}でも仏道^{ぶつだう}でも、何でもかでも、取こんでおはなし申^{まう}ます。か
ならず軽口^{かるくち}ばなしのやうなと、御笑^{おわら}ひ下^{くだ}されな。

非母語話者であるイビーは自分の日本語がたとえ至らなくても戸惑わな
いよう聴衆に求め、また鳩翁は通俗平易で折衷的な説教への理解を求めて
いる。言う内容は異なるが、このような前置きのねらいが、話し手と聞き
手の距離を縮め、聞き手の注意を話の内容に向かわせる意図は両者に共通
する。また聴衆に向かう物腰が似ているように感じるのは稿者だけだろう
か。

さて、説教が本題に入り、十戒や経書の引用について一通り説明したあ
と、より深い理解を促すために、譬えを引き合いに出す段になって、鳩翁
は「これに付^つておもしろい咄^{はな}しがある s26018/ 是^{これ}で面白^{おもしろ}ひ話^{はなし}がござります
s24018/ 此^{この}類^いまれぬといふについて、今一つ話^{いまひとつ}がある s24305」という類
の言葉を口にし、説教に区切りをつけ、聴衆の気持ちを切り替えさせる。同
様にイビーも挿話に移るとき「こゝに^{この}一^{ひとつ}の話^{はなし}があります e60609-10」と前
置きしてから譬え話を語り始めている。

昼間働く庶民のために夜間催される道話において、鳩翁は会衆の労をねぎらい、居眠りを防止するために、譬え話を始める際に「御ねむからうが、聞ておくれなされませ s24610-11/ 眠ぎましに能う聞て下さりませ s24305-06/ 序に聞て下さりませ s26018」とひとこと添えることがよくある。同じようにイビーも、新たな話題に入る節目で「どうぞ辛抱してお聞くだされ e40405」と述べ、聴衆への配慮を示している。

聞き手の興味を話の内容に引き寄せるためには、感情ゆたかな話し方(レトリックという詠嘆法)や、聞き手への問いかけ(設疑法)が、説得に有効な修辭的技法であることが知られている(野内 2007:181)。イビーは詠嘆と設疑の両方を組み合わせて「ちよつととけいをごらんさいなんとこまかいしかけではござりませぬか e10611」「なんとまあばかばかしいことでござりませぬか e10906-07」のように聴衆に語りかけている。感情(パトス)への働きかけは、むしろ鳩翁の得意とするところで、彼はこの「なんと…か」を機会あるごとに発している。「ナントありがたひものではござりませぬ歟 s25216/ ナント気の毒なものじゃござりませぬ歟 s26704/ ナント恐ろしいは人のこゝろでござります s26813」など用例は多い。

詠嘆の類例として「実に…」も両者が共用する。イビーが「實に愕然むべきこととござります e71310-11/ 實に慨嘆なるものでござります e71403」, 鳩翁が「実にあはれに、気のどくなものでござります s25117」のように発言し、要所において聴衆の共感を呼び込もうとしている。

譬え話の締め括りや説教の終わりには、いま話した内容を心にとどめ、実践に結びつけるよう念を押す言葉がよく添えられる。イビーの「父母に孝敬なされまし e60903/ くれぐれもこれを聖くおまもりなされませ e51302」, 鳩翁の「御気づかひなしに御つとめなされませ s23801-02」などが、この念押しの勸奨文句に当たる。

そして説教の最後は、イビー「このつぎは次の講しやくにいたして今日(こんにち)はこれまでといたしましょう e41210-11」, 鳩翁「猶またあとは明晩御(めいばんお)はなし申ませう s25411-12」のように結ぶことが多い。

以上、説教の流れに沿って、『眞の生命』と『鳩翁道話』の言語形式上の類似点を概観した。イビーが鳩翁の道話だけを拠る所に、日本語を学び、説教を準備したことはありえないが、教科書・参考書としての『鳩翁道話』の存在意義が大きかったことは想像に難くない。

7.『眞の生命』の特徴その一：世相や日常生活に密着した譬え

ここから第11節まで『眞の生命』の特徴として5点を挙げて考察する。文明のまだ開けきらない1876（明治9）年に来日したイビーは、「あまたのかみをあがめるe10408-09」日本人を前にして「天地萬物をつくりたまひしひとりのかみe10402-03」を説くのに、さぞ苦勞したことであろう。当時の世相にからめ、日常的で身近な譬えを用い、人々の興味を喚起しながら福音を伝えようとしたイビーの工夫が『眞の生命』の随所に見られる。

まず第1戒「なんぢ、わがまへにわれのほか、かみありとすべからず」を説くにあたり、「神と人間とのかゝはり」方を、「政府や國」と「人民」との関係になぞらえる。政府の「おきてをいさゝかこゝろゑてゐる」国民は、国家に「ちうぎをつくすことができ」るように、神について知識を得ることが信仰につながるというのである（第1巻10頁）。

また第2戒のうち「…われエホバ汝の神はねたむ神にして…」の「ねたむ」という語の「義」を説くために「政府や天皇さま」を引き合いに出す。「かみの権理」と、政府や天皇が「このくにをごしはいなさつたりじんみんををさめたりなさる権」とを並行的に論じる。日本の政府は「ほかのくにの王に日本國へ御布告をださせたり」せず、また天皇は「ほかのひとをじんみんのうやまふものとする」ことを許さない。これらの行為は政府や天皇に対する「むほん」に当たるとする。それと同じように神は「神にまかせたのむものをまもつて、これをあわれみめぐむ」が、その一方で「かみにつかへるじやま」をする「むほん人」を「ねたむ」というのである（第2巻8～9頁）。

これらは明治の新しい国家体制という時代的な背景を生かした喩えである。政治制度ばかりではなく、そのころ一般に普及しはじめた時計も見逃さなかった。第1巻において「天地萬物」の「造物主」なる「眞の神」を、「自鳴鐘」と「とけい師」に喩えて次のように説明する。

『眞の生命』第一巻（e10608-709）

まづ天や地や陸や世界やそのほか都てつくられてあるいろいろなものをみても。何處から此らがまいりましたか。偶然にできたとおもひますか たゞしは自分で自分をつくりたものでござりませうか。こゝろみにちよつととけいをごらんなさい。なんとこまかいしかけではござりませぬか。〔中

略) 自鳴鐘とけいをごらんなすつてもこのとけいよりもたつといこのとけいを
つくつたとけい師しがなくてはならないといふことがたやすくわかりましょ
う。これはこれこのとけいのつくりぬししがある證據しやうこでござります。おなじ
だうりでなにごとにかぎらずつくりぬしはつくられたものよりもおほいな
るものでなにもでますでにあるとあらゆるものはみなつくりぬしがござ
ります。かように何物に造物主も造り主も證も草木もなにもかもあたはざ
ることなきつくりぬしのあるしやうこでござります

8.『眞の生命』の特徴その二：自説の正しさを立証する譬え

上の引用では、天地創造という規模が大きすぎて知覚が困難な主題を、
時計の製作者という日常レベルの身近な事例に引き寄せ、被造物とその造
物主の関係を論じている。注目すべきは「證據しやうこ」という語を用
い、時計の譬えを根拠能にしながら「あたはざることなきつくりぬし」の存
在を証明しようとする論じ方である。

第2戒の「われエホバなんぢのかみはねたむかみなればといふおいまし
めのわけをろんじまじやう e20807-08」の「ろんじ(る)」からも、イビー
の論理を志向する姿勢が読み取れる。

イビーの説教は理屈を積み重ねて説き伏せる論じ方、いっぽう鳩翁の説
教は感情に訴えて同調を誘う語り口によって特徴づけられる。レトリック
つまり説得の技法から性格分けすれば、イビーはロゴス(論理)優先型、
鳩翁はパトス(感情)優先型ということができ、両者は好対照をなす。

イビーの論理志向は、説教の流れを示す接続表現の多さにも見て取れる。
「しかしながら e10310/ しかるに e11411/ したがつて e50811/ なぜといふ
に e10603,10605/ なぜなれば e10901/ ゆゑに e10604,60801」ほか様々な接
続表現を駆使し論理の展開方向を明示している。もちろん鳩翁も「(かるが)
ゆゑに s23804」などの接続表現を使うし、また「証しやうこ s23706」という語
も用いる。このように鳩翁とて論理に背を向けているわけではないが、ロ
ゴスの占める比重はイビーよりずっと軽い。

ロゴスを志向するイビーであるが、その論理はしばしば飛躍しがちであ
る。先の引用(e10608-709)を例に、イビーの論法とその欠陥を確認して
みよう。まずイビーは「自鳴鐘とけい」が「偶然しぜんにできた」ものでも「自分自分で自
分をつくりたもの」でもなく「とけい師し」が製造したものであることを確

認する。次にイビーは、「^{と け い}自鳴鐘」が「^{し ょ}とけい師」の存在を裏付ける「^{し ょ う こ}證據」であるように、天や地などもその「^{し ょ う こ}つくりぬし」がいる「^{し ょ う こ}證據」に他ならないと主張する。

この論証には次のような欠陥がある。天や地などは「^{し ぜ ん}偶然にできた」ものでもなく、また「^{じ ぶ ん}自分で自分をつくりたもの」でもないことを大前提として、その点には触れずに、話を進めていることが、まず第一の問題点である。次に、これと関連して、天地の創造主を喩える例として、時計の製作者が適当かという疑問が生じる。

イビーは、時計と「^{同 上 道 理}おなじだうり」で、天や地などが「^能あたはざることなきつくりぬし」による被造物であると主張するが、そこには論理の飛躍がある。時計を見てその製作者の存在を認めることが、天地の創造主を認めることには直結しない。喩える事例が、喩えられる対象の極端な単純化（あるいは誇張）であり、両者を同列に捉えることはできないからである（柳沢ほか 2004:66）。にもかかわらず上記の引用は、天地の創造主を、時計の製作者に喩えることによって、あたかも神の存在を証明したかのように思わせている。議論の余地のない自明の身近な具体例を示すことによって、未証明の自説を暗黙の了解事項にすりかえ、説得効果を高めていることになる。

先の引用は説得の修辞技法として比喩のほか、2～3行目に設疑法「^{し ぜ ん}偶然に…と^思おもひますか」「^{じ ぶ ん}自分で…でござりませうか」、4行目に詠嘆法「なんと…ではござりませぬか」を織り込んでいる（先の第6節も参照）。天地は自分で自分をこしらえたか、という問いは聞き手の気持ちを「いや、そうではない」という方向に誘導する。語り手が自説を一方的に押しつけるよりも、聞き手がその説を能動的に選び取るように仕向けたほうが説得に有利である（野内 2007:181）。イビーは、天地が「^{し ぜ ん}偶然にできた」はずはない、という考えに聴衆を導き、創造主を受け容れる素地を整えたうえで、時計師の喩えを提示するという段階を踏んでいる。しかも、時計の喩えは詠嘆法を伴い、聞き手の共感を誘っている。イビーは、持ち前のロゴスによる説得の論法に加え、鳩翁お得意のパトスを揺さぶる語りかけも取り入れ、時計内部の精巧緻密な機構が、自然界の巧妙な成り立ちと共通することを訴えている。ロゴスを主軸に据え、パトスにも働きかけることによって、時計の製作者を天地の創造主に喩えることを妥当に思わせ、共感

を呼び起こしながら論述しているのである。

9.『眞の生命』の特徴その三：他説の誤りを強調する譬え

自説を擁護すると同時に、他者の説を退けるためにも、イビーは喩えを活用している。本格的な進化論批判も展開しているイビー（1884）は『眞の生命』（e40612-710）においても、滑稽な喩えを引き合いに出して、進化論を嘲笑のもとに一蹴している。

イビーは皮肉をこめて進化論を「自然薯が鰻となるといふお説 e40704-05」に喩えて笑い飛ばしたうえ「猿さるの父おやぢは蛙かいらだの人間にんげんの祖父ぢいさまは猿さるだなどといふ e40709-10」極端な例をユーモア交じりに紹介し、その信憑性を地に墮とす。このような誇張法で進化論を誹謗したのち、聴衆に向けて、こんな馬鹿げた進化論をまさか「まことゝはなさりますまい e40710」と問いかける設疑法によって進化論を否定し「萬物を造た神 e40701」へと導く。全体の論調は、進化論と「萬物を造た神」を対照させる修辭技法をとっている。

相手を低めつつ自己を高める対照の技法は、これ以外にも、閻魔王と眞の神（e31410-31501）、仏教の伽藍とキリスト教の会堂（e41112-41206）、安息日を守る国と守らない国（e41209-10）などにも適用され、キリスト教礼讃と異教批判を一石二鳥にこなしている。

以上、第8～9節では『眞の生命』において喩えが、自己の主張の正当性を高め、また相手の主張の信憑性を低める、論理の構築に利用されていることを確認した。

なお論駁すべき具体的な相手がいない場合でも、譬えは、反対意見を想定し予防線を張るのに便利である。イビーは譬えを仮定法として、「譬は…e50810/ たとへばもし…ば…e20303/ もし…とすれば…e20911-12/ もし…なら…e21011-12」のようにも用いる。このような仮定法では、喩えられる対象と、喩える例の距離が近い理解容易な例が選ばれている。論理の構築と聴衆の説得に、譬えが様々に有効利用されている。

10.『眞の生命』の特徴その四：実例による説得効果の向上

実際の事例を紹介する挿話も、主張を裏付け、説得力を高めるのに効果的である。安息日の戒律をめぐる『眞の生命』第4～5巻では、キリスト

教国の実情や日本の先行事例を紹介しながら、イビーは安息日を守ることが精神的にも肉体的にも実利的にも効用が期待できると説く。

第4巻の導入部は、日本でも諸官庁が日曜の休日制度を採用したという時事的な話題で始まる。

『眞の生命』第四巻 (e40111-202)

さきごろ日本の政府からこれまでしきたつた諸官省そのほかの休日^{きゅうじつ}をあらためて國中七日^{こくちゅうなぬか}に一日やすむやうにといふ御布告^{ごふこく}が出ましたがこの日はてうど聖教^{せいけう}の安息日^{あんそくにち}とおなじこととござります。

この「御布告」^{ごふこく}とは、1876（明治9）年3月12日の太政官達第27号「従前一六日休暇ノ處來ル四月ヨリ日曜日ヲ以テ休暇ト被定候條此旨相達候事」をさす。それまでの1と6のつく日の休暇を、欧米式に改めた新制度である。人々の記憶に新しい印象的な出来事を「…はてうど…とおなじ」という譬えの文型に当てはめてキリスト教の安息日の話題導入に用いている。

同じ第4巻（e41005-08）ではキリスト教の諸外国で週一度の安息日が生活習慣として根付いている実情を伝え、また次の第5巻（e51104-10）では安息日に家業を休んで仕事のはかどった静岡の信徒の先例を紹介している。これらの挿話は、すでに実践で効用が確かめられた事実の紹介であるだけに証拠能力が高い。日曜日の安息が「たましひのすこやかになるのみならず體^{からだ}にもおめぐみをいただけ e41304-05」る日であるという第4巻の主張の説得力を高めている。日本が欧米に倣って「休日^{きゅうじつ}をあらためることなどは國家^{こくか}にとつて さのみ緊要なことではないから たゞ泰西^{たいせい}の真似^{まね}だらうなど、おもひ e40203-04」がちな人々に、考え方の修正を迫る挿話である。

キリスト教国の習慣を日本になぞらえて説明する類例として「キリスト教の國々では昔日本で神文状を認たやうに〔中略〕神の聖名よつて誓^{ちかひ}をたてることがまいとござります e30612-702」という実話も挙げられている。

実話と同じく、具体的な実名の例示も説得力を増す。神の偶像^{えいざう}を作ることについて「よしや左甚五郎のやうな彫工^{ほりものし}でも元信のやうな画工^{えがし}でも〔中略〕こしらゆることはできませぬ e30303-06」と断言している。ただ漠然

と彫刻の名人というより「左甚五郎^{ひだりじん ころう}」と具体的に名指しするほうがピンとくるし、「(狩野^{もとのぶ})元信」を知る人には傑出した大絵師という抽象的な表現よりも話が早い。

11.『眞の生命』の特徴その五：物語形式の喩え話が少ない

イービーは短い語句による喩えを好んで用いるが、『眞の生命』には物語形式の長めの喩え話も見られる。下記の赤子を川に落とした物語はその代表例で、起承転結が明瞭な意外性のある諷諭にまともっている。

『眞の生命』第六巻 (e60609-708)

こ、に^{ひと}一の話^{はなし}があります或^{ある}田舎^{いなか}の人が夫婦^{ふと}して赤子^{あかこ}を連^{つれ}て都^{みやこ}へ行^{ゆき}て戻^{もど}り道^{みち}少^ちと酒^{さけ}を飲^のみすぎて時^{とき}も早^{はや}黄^ひ昏^くの頃^{ころ}好^よい機^き嫌^{げん}で打^{うち}連^{つれ}立ち家^{いえ}路^じを指^{さし}てかへりましたが途^と中^{ちゆう}に早^{はや}川^{かわ}がありまして其^{その}所^{ところ}は徒^た歩^ぽして通^{とほ}らねばならぬ所^{ところ}故^ゆ夫婦^{ふと}して赤^{あか}兒^ごを夜^よ風^{かぜ}にあた^{あた}らぬやう布^{ぬの}もて其^{その}兒^こを包^つみなどしさて父^{ちち}の申^{まう}すやう汝^{そなた}はもとよりかよわき女^{おんな}早^{はや}瀬^せを渡^{わた}るさへ漸^{やうやう}のことゆゑ赤^{あか}兒^ごは我^{われ}に任^{まか}せて置^をけと妻^{つま}は甚^{はなは}だ危^{あや}ぶみて強^{しい}ても赤^{あか}兒^ごを抱^{いだ}て行^い度^だは思^{おも}はれど夫^{おとこ}の深^{ふか}く酔^よてあれは逆^{さか}ひては猶^{なほ}危^{あや}しと余^{あか}儀^ごなく赤^{あか}兒^ごを渡^{わた}しましたがやがて向^{むか}ふ岸^{きし}に着^つき妻^{つま}はあはたゞしく包^{つかみ}を解^いて見^みると等^{ひと}しくあつと叫^{さけ}びましたが此^こは如^いかに包^{つかみ}はあれども憫^{あは}れ哉^れ赤^{あか}兒^ごはいつしか川^{かわ}へ轉^{ころ}び落^{おち}しが愚^{おろ}かな父^{ちち}は之^こを知らず赤^{あか}兒^ごは包^{つかみ}の中^{うち}にあると思^{おも}ひ又^{また}親^{おや}の務^{つとめ}も盡^{つく}したと思^{おも}ひました此^こは憐^{あは}れな一^{ひと}話^わでありますが今^{いま}世^せ間^{けん}の親^{おや}、も随^{ずい}分^{ぶん}是^{これ}にひとしきことをして居^をります

この物語は第5戒「汝^{なんぢ}の父^{ちち}と母^{はは}を敬^{うやま}へ…」に関連して、「子^この務^{つとめ}と親^{おや}の務^{つとめ}とは筍^みと蓋^{ふた}との如^{ごとく}ちやうど出^で遇^あふものゆゑいさ、か親^{おや}の務^{つとめ}を説^をきましやう e60511-12」ということで、親^{おや}が子^こに果たすべき義務^{みこころのみち}について講^をじた後に登場^でする。乳^{ちち}兒^ごを包^{つかみ}む布^{ぬの}は、子^こに対する物質^{ぶつ}的な世^よ話^わや知^ち識^しの教^を育^をを象^し徴^{てい}する。いかに物質^{ぶつ}的^{てき}・知^ち的^{てき}に豊^{ゆた}かであつても「親^{おや}が子^こに眞^{まこと}理^のを教^をふべき務^{つとめ} e60810」を果たさなかつたら、その子^こは「魂^{たま}の深^{ふか}底^みに陥^{おち}る e60709-10」ほどの危^{あや}機^めに瀕^{ひん}することを、早^{はや}瀬^せに落^{おち}た赤^{あか}子^ごに譬^{たと}へた話^わである。

この物語はおおよそ350字ほどの分量があり、『眞の生命』の中では例外的に長い喩え話である。ロゴスによる説得には早い文体が効果的であり、パトスによる説得にはゆっくりとした文体が向くとされる（柳沢ほか

2004:70). 論理志向の説教にとって、必要以上の詳細さは冗長さを増すだけで、逆効果になりかねないことを、イビーは心得ていたのであろう。

12. 『鳩翁道話』における喩えの役割

これまで見てきた『眞の生命』と対照的に、『鳩翁道話』の喩えは物語形式の長い話が中心である。前節で紹介した『眞の生命』第6巻の赤子を川に落とした約350字の話は、『鳩翁道話』ではむしろ短い部類に属する。『鳩翁道話』は長い喩え話で成り立っており、鳩翁の説教から物語を抜いたら、あとには何も残らない、と言っても大袈裟ではない。『鳩翁道話』の魅力は、なんと言っても、じっくり聴かせて心に響く語りの醍醐味にある。

例えば『鳩翁道話』正篇（壺之上～三之下）から特に長い物語を挙げると、壺之下では「のら息子の話」1つが説教全体の8割強にわたり、また式之下の半分以上は「若気のあやまち」という話が占め、さらに「恐ろしい継母の話」は三之上から三之下にかけて途中の休憩をはさんで長い話が繰り広げられる（各話の題名は柴田1970の小見出しに拠った）。

逆に、物語形式の喩え話のうち短めの代表例として、壺之上の「さざえの自慢」約500字や、式之上の飯蛸を蜘蛛あしらひした400字強の話などが挙げられる。

『鳩翁道話』の喩え話は、長いのに加え、描写の詳しさも特徴的である。例えば壺之下「のら息子の話」では、甘やかされて育った、たった一人の放蕩息子を、親類縁者が集まって勘当しようと評議する晩の出来事が活写される。

ある日この放蕩息子が近村で博打をうっていると、村の友達が来て、今宵その放蕩息子を勘当するために親族が集うという。そこで息子は評議の場に入り込んで手切れ金をせしめようと算段する。夜になり自宅の庭に忍び込んだ息子は、雨戸の隙間から中の様子をうかがいつつ、踏み込む頃合を見計らっていた。

ここまでが、物語の序盤のあらましである。舞台のお膳立てが整い、いよいよ話が佳境にさしかかろうとすると、鳩翁は「不思議に此のらむすこが、悪心あくしんをひるがえして、大孝行だいこうかうの人になるといふ、是からが成仏じやうぶつの段でござります s24918-25001」と先の展開を予告し、聴衆の期待を盛り上げ

る。物語の続きを追っていこう。

親族会議の席上、年老いた母親と父親はそれぞれの口から、子を思う親の心を涙ながらに切々と吐露する。両親の慈悲深い言葉に打たれた息子は、^{こゝろ}雨戸の外にいて「^{こゝろ}声をあげてなかれはせず、^{そで}かます袖を口にくはへて、大地にたふれて、しめ泣にないてゐる s25205-06」のである。聴衆からおも涙頂戴の感動的な場面である。

この物語は要するに、放蕩息子から孝行息子への改心譚だと言でまとめてしまえばそれまでだが、本書は現代人がいま読んでも胸に迫るものがある。鳩翁が、ここに登場する父親、母親、息子、親類らの口調を使い分けながら、熱演した様子が、文面に書き記された直接話法から偲ばれる。アストンが本書を評して「これ以上に面白い説教はどこにも見つけられない」(Aston 1899:343)と絶賛したのにも首肯できる。

いっぽう『眞の生命』にはこの種の直接話法が極めて少ない。先の赤子落水の話で父親が渡河の前に母親に向かって「^{そなた}汝はもとよりかよわき女^{おんな}〔中略〕^{あかこ}赤兒は我に^{われ}任せて^{まか}置け」という台詞と、渡河後に母親が発する「あつ」という叫び以外に、直接話法は全7巻を通じて1例も見あたらない。『鳩翁道話』が地の文と台詞(演技)の組み合わせであるのと対照的に、『眞の生命』は地の文つまり素のままのイビーの語りだけで成り立っている。

鳩翁の演技で聴衆を泣かせる「のら息子の話」は落語の人情噺を彷彿とさせ、また式之上の飯蛸を蜘蛛あしらいした小噺は終わりをサゲで締めくくる落し噺にはかならない。説教と落語の密接な関係が指摘されているように(関山 1974, 延広 1974)、鳩翁の喩え話は長短を問わず、娯楽性を備え、笑いと涙のうちに聞く人の心をつかむ。道話は説教であると同時に演芸でもある。落語と異なるのは、話の要所所で人生哲学や処世訓を引き出し、ごく自然にしかも印象的に心学の教義と結びつける巧みな展開である。

かの放蕩息子^{ひとびと}が親の慈悲深さに打たれ涙を流して改心へと向かう山場で、鳩翁は「人々固有^{ひとごう}の本心といふて、あきらかな徳^{とく}を生れ付てはゐれども、おのれが氣随氣まゝの身勝手^{うま}で、しばらくその光りをかくしてゐたのじや s25210-13」という心学の奥義をさりげなく挟みこむ。心学の趣旨は「人の性は善なり」という孟子の性善説に立つ。人それぞれが生まれつき持っている善なる本心に立ち返れ、見失われた本心を取り戻せと諭す。

生き生きと臨場感ゆたかに語られる喩え話は、聞く人に感銘を与え、そこに託された真意を、他人事でなく自己の問題として受け取り、心にとどめて内省を促す訴求力を備える。鳩翁の喩え話は、決して無駄に長いのではない。語りの詳細さと具体性が共感を誘い、説得効果を高めているのである。

13. まとめ：イビーと鳩翁それぞれの説得技法

小稿では『眞の生命』と『鳩翁道話』の類似点と相違点を検討した。両書は日本語の諸表現について共通性が認められた。これらは説教を組み立てるうえで部品に当たる細部の要素といえる。いっぽう相違点として、喩えの用法にそれぞれの特徴が見られることを確認した。これは説教で聴衆をどう説得するかという大きな枠組みが異なることを意味する。

『眞の生命』からはイビーのロゴス（論理）を重視する傾向が読み取れた。主張する内容が合理的であることを示す証拠として、論述を進めるうえで必要に応じて譬えが挿入されていた。そのため譬えは、比喩する側とされる側の対応が比較的わかりやすい例が選ばれ、論旨の流れを邪魔しない短めの譬えが理詰めの説得に効力を添えていた。

いっぽう『鳩翁道話』は、パトス（感情）に訴えかける物語形式の長い喩え話を説教の主軸に据え、その物語から教訓を引き出す形で心学の奥義に言及がなされる。教義が物語の中に織り込まれているため、譬えに託された真意は言われるまで気づきにくい場合も多い。そのぶん聴衆は、鳩翁が熱演する物語に没頭でき、感銘を受けやすくなる。

『眞の生命』には現代人が説教という言葉から連想する実直さがあり、『鳩翁道話』にはそういう硬質な説教のイメージがない。イビーと鳩翁の個性が際立つ両書である。

参考文献

イビー^{〔ママ〕}、チャールス（1884）『眞^{まこと}の生命^{いのち}』倫敦聖教書類会社

〈https://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/image/04-honbun-pdf/190485629_web/190485629_web.pdf〉

イビー、チャールス（1884）『第一東京演説：學術に據て基督教を論ず』英国聖書会社
 〈<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/824831>〉

- 金沢朱美 (2013) 「アーネスト・サトウ, ウィリアム・アストン, ジョン・オニールら
が使用した日本語学習書の一考察:『鳩翁道話』を中心に」加藤好崇ほか編『日本語・
日本語教育の研究: その今, その歴史』スリーエーネットワーク, 163 ~ 175 頁
- 楠家重敏 (2005) 『W.G. アストン: 日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』雄松堂出版 (東西交
流叢書 11)
- 沢田泰紳 (1976) 「イビーにおける伝道とキリスト教理解」山梨英和短期大学紀要編集委
員会『山梨英和短期大学紀要』第 10 号 67 ~ 84 頁
<<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000967494>>
- 沢田泰紳 (1984) 「御雇教師第一号 C・S イビーの招聘をめぐる」地方史研究協議会・
編『甲府盆地: その歴史と地域性』雄山閣 369 ~ 385 頁
- 柴田実 (1970) 校訂『鳩翁道話』平凡社 (東洋文庫 154)
- 柴田実 (1971) 編著『石門心学』岩波書店 (日本思想大系 42)
- 関山和夫 (1974) 「説教から落語へ」學燈社『國文學: 解釈と教材の研究』第 19 卷 11
号 (9 月臨時増刊号: 古典落語の手帖) 89 ~ 96 頁
- 竹本英代 (2004) 「宣教師の日本語教育: 1890 年代までのアメリカン・ボード宣教師を
中心に」同志社大学人文科学研究所・編, 教文館『アメリカン・ボード宣教師: 神
戸・大阪・京都ステーションを中心に, 1869 ~ 1890 年』(同志社大学人文科学研
究所研究叢書 X X X VII) 359 ~ 387 頁
- 津田秀夫 (1976) 「教育の普及と心学」岩波書店『岩波講座日本歴史 12 近世 4』147 ~
189 頁
- 野内良三 (2007) 『レトリックのすすめ』大修館書店
- 延広^{のぶひろ}真治 (1974) 「江戸落語の展開: 心学道話との関連において」學燈社『國文學: 解
釈と教材の研究』第 19 卷 11 号 105 ~ 111 頁
- 平岩愼保 (1942) 談「南部豪軒學舎及び甲府修學時代」内藤章・編『直温^{ただやすないとう}内藤宇兵衛^{うへゑ}』
188 ~ 191 頁 <<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1024404>>
- 保坂忠信 (1981) 『英語世界の中で』開隆堂, 89 ~ 127 頁「遙かなるプラトウー漂泊の
宣教師: C・S・イビーの自伝を中心として」, もと 1980 年『山梨学院大学一般
教育論集』第 3 号 1 ~ 42 頁に掲載
- 松本隆 (2016) 「日本語学習素材としての 1881 年刊『新約聖書 馬可傳 俗話』: 明治初
期に來日した外国人宣教師むけ専門日本語テキストの文体」アメリカ・カナダ大学
連合日本研究センター『日本研究センター教育研究年報』第 5 号 94 ~ 103 頁
<http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2016_Matsumoto_a.pdf>

- 丸山真男 (1996) 「ベラー『徳川時代の宗教』について」岩波書店『丸山真男集：第7巻 1957-1958』253～289頁、もと1958年『国家学会雑誌』第72巻4号に掲載
- 宮田光雄 (2003) 『権威と服従：近代日本におけるローマ書十三章』新教出版社
- 森岡健二 (1980) 「口語史における心学道話の位置」国語学会『国語学』第123集21～34頁〈http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/view.php?h_id=1230210340〉
- 柳沢浩哉／香西秀信／中村敦雄 (2004) 『レトリック探求法』朝倉書店 (シリーズ日本語探究法7)
- Aston, William George (1899) *A History of Japanese Literature*. London: William Heinemann.
 〈<https://archive.org/stream/historyofjapanes00astouoft#page/n11/mode/2up>〉
- Bellah, Robert Neelly (1957) *Tokugawa Religion: The Value of Pre-Industrial Japan*. Illinois: The Free Press. 堀一郎／池田昭 (1962) 訳, R.N. ベラー著『日本近代化と宗教倫理：日本近世宗教論』未来社
- Bellah, Robert Neelly (1985) *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan*. New York: The Free Press. 池田昭 (1996) 訳, R.N. ベラー著『徳川時代の宗教』岩波書店 (岩波文庫 33-472-1)
- Eby, Charles Samuel (1881) *Kiuô Dôwa: Ichi no Jô. A Japanese Sermon Transliterated and Annotated with Vocabulary*. Yokohama: Kelly & Co.
- Eby, Charles Samuel (1892) *Kyûô Dôwa: Ichi no Jô and Ichi no Ge, with Vocabulary*. Tokyo: Z.P.Maruya & Co. (Maruzen)
 〈<http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000525005-00>〉
- Mitford, Algernon Bertram (1871) *Tales of Old Japan*. London: Macmillan & Co.
 〈<https://archive.org/details/talesoldjapanwi00mitfgoog>〉
- O'Neill, John (1874) *A First Japanese Book for English Students*. London: Harrison & Sons.
 〈https://books.google.co.jp/books?id=j0ARAQAAIAAJ&pg=PP7&hl=ja&source=gbs_selected_pages&cad=2#v=onepage&q&f=false〉
- Publishing Committee, ed. (1883) *Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan: held at Osaka, Japan, April, 1883*. Yokohama: R.Meiklejohn & Co.
 〈<https://archive.org/stream/proceedingsofgen00geneuoft>〉